

青少年 はちのへ



# かがみ

青少年健全育成シンボルマーク



【発行】 第100号

八戸市教育委員会教育指導課

八戸市内丸一丁目1-1

Tel 43-2111(内6112)

Fax 47-4997

Eメールshido@city.hachinohe.aomori.jp

令和2年7月10日号

## 地域全体で、子どもたちを見守り、育てる

青少年を非行から守り健全に育成するための様々な情報を掲載した広報紙「かがみ」が、令和2年7月の本号をもって記念すべき100号を迎えました。

これまで本紙では、子どもたちのあいさつ運動の様子や地域住民による子どもたちの健全育成に関する活動等を紹介するとともに、地域全体で、未来を担う子どもたちを見守り、育てていくことを啓発してきました。



そこで、今回は、40年以上の長きにわたり、子どもたちの見守り等に御尽力いただいている少年指導員の黒田長子(くろだ ひさこ)さんの活動等を紹介します。

少年指導員は、地区青少年生活指導協議会の代表者、小・中・高等学校の教員、小・中学校PTAからの推薦者、大型店舗の職員等、146名に委嘱され、少年の非行防止と健全育成を図るため、繁華街及び地区やお祭りの巡回活動を実施しています。昨年度は、延べ752人の少年指導員により、222回(新型コロナウイルス感染拡大防止のため3月の巡回は中止)の巡回活動を実施し、地域の子どもの見守りをしていただきました。



### 子どもを笑顔にする温かなまなざし

#### ～ 少年指導員 黒田長子さんの活動の紹介 ～



黒田さんは、少年指導員としての巡回活動等の他に、根城地区の青少年生活指導協議会副会長として、地区の子どもたちを見守り続けてきました。特に、登校時の朝7:00～8:00には、子どもたちに声をかけながら、交通安全指導を行うなど、子どもたちの見守りを含めた地区全体の安全を守る活動に尽力しています。

黒田さんは、登校時の子どもたちに温かなまなざしを向けながら、通学路の交差点であいさつや声かけ等を行っています。黒田さんが子どもたちに「おはようございます」「いってらっしゃい」と微笑みながら声をかけると、子どもたちも、黒田さんにさわやかにあいさつを返してくれます。



黒田さんの見守り活動の様子

黒田さんは、「毎朝、あいさつや言葉を交わしながら、子どもたちの表情を見ただけで、その日の子どもたちの心身の調子がわかる」と話していました。

黒田さんの温かなまなざしや声かけ等により、子どもたちは、大人に見守られているという安心感もちながら笑顔で登校することができます。

このように、地域全体で見守り続けることは、安全で安心な環境づくりや子どもたちの健全育成へとつながります。

今後も、地域の温かいまなざしによる見守り活動等を通して、次代を担う子どもたちの健全育成に全市をあげて取り組んでいきましょう。

なお、地域での子どもたちの見守り活動等については、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、当面、地域の実情に応じて、可能な範囲・方法で実施して下さるようお願いいたします。

## 「あたり前でない日常」

八戸市教育委員会 教育長 伊藤博章



静まりかえった学校の正門から花束を手にした一人の女性が出てきた。うつむき加減に歩くその姿を見て、今日が離任式の日であることに気がついた。

新型コロナウイルスによる緊急事態宣言で、日本のみならず、世界中の日常がこれまでの日常でなくなった。

普段なら、同僚や子どもたちに囲まれ別れを惜しみながら盛大に見送られたであろう先生は、どんな思いで学校をあとにしたらろうか。離任式ばかりではない。子どもたちにとって、一番の晴れの舞台であるはずの卒業式も入学式も残念なことに規模を縮小しての式典となってしまった。

誰も経験したことがない、この2か月にわたる長い休校は子どもたちだけでなく、大人たちにも大きな変化をもたらした。家庭環境の違いはあるものの、生活習慣の乱れや体力の低下、ストレスの増加など、さまざまな問題を誰もが抱えることとなった。

反面、悪いことばかりではない。家庭で過ごす時間が増え、家族との絆を考えさせられた貴重な時間だったという声も聞こえてきた。

学校では学べない家庭での生活の中で、子どもたちなりに、さまざまなことを体験し感じ取って、ひとまわり大きくなったのではないか。

5月7日、ようやく学校の教育活動が再開された。登校を待ちわびていた子どもたちからは、「友だちに会えてうれしい」「学校って楽しい」という声が聞かれた。これまで、さほど意識したことがなかった学校という場が特別な場所だったんだという思いを強くしたにちがいない。ある先生は、「子どもたちに久しぶりに会ったら学校にいた時より随分、大人になったようでびっくりした」と言っていた。

少しずつ平穏な日常がもどりつつある。都道府県間の移動も自由となった。感染を過度に恐れず、「いま」「ここ」にある「あたり前」が、どれだけ大切なことなのか見つめ直す機会となったのではないか。

そして今も、自らも危険にさらされている過酷な状況下で患者を救うため日々、治療にあたっている医師や看護師がいることを忘れてはならない。医療従事者のみならず、わたしたちが「あたり前」と思って暮らしている生活はこうした多くの人々に支えられていることも「コロナ」は教えてくれた。